

平成 27 年度 博士学位請求論文要旨

ディープンカラシュリージュニャーナ研究

望月 海慧

11 世紀にチベットに仏教を伝えるためにインドのヴィクラマシーラ僧院からチベットに招かれた *Dīpaṃkaraśrījñāna* は、その後のチベット仏教の形成に大きな影響を与えたと言われている。チベット仏教思想を大成した *Tsong kha pa Blo bzang grags pa* が彼の『菩提道灯論』に基づいて『ラムリム・チェンモ』を著したことで、同論がチベットにおける道次第の思想の基盤を作った、とされているからである。それ故に、従来の彼に対する研究の多くは『菩提道灯論』に基づいてなされてきた。

本研究では、『菩提道灯論』だけでなく、彼のすべての著書を総合的に解読することで、彼の思想を解明しようとするものである。そのための研究対象となるものは、チベット大蔵経のテンギュルに収録されている彼の著書全体である。ただし、顕教文献を中心に考察している。密教文献は、特定の者を対象にして説かれるものであり、それを顕教文献と同列に扱うことはできないからである。*Dīpaṃkaraśrījñāna* 自身は、自らの著書が顕教か密教なのかという判断基準を持っており、後者は不特定の者に説いてはならないものである、という認識を有していたはずである。それ故に、彼の思想を考察する場合も、顕密の区別を行う必要があるからである。

第1部では、テキスト研究の考察の前提となる資料を提示した。その第1編では、予備的考察として、まず、彼の名称について検討した。チベットにおいて、*Atiśa* として知られているが、テンギュル収録されている彼の著書では、その著者はこの名称で呼ばれていない。すなわち、これらの文献を対象とする本研究では彼を *Dīpaṃkaraśrījñāna* とする。続いて、彼の伝記を紹介した後、インドにおける彼の活動について考察を行った。また、本研究で扱う文献の書誌情報と、従来の研究を簡単に紹介した。ただし、テンギュル所収の文献を研究対象としたために、蔵外文献についてはリストから外れている。

第2編では、彼の思想を形成する背景として、先行する論師の思想的影響を考察した。まず、彼自身が中観論者と認識しているために、彼の *Nāgārjuna* 観を考察した。続いて、彼の著書において最も多くの著書を引用している *Śāntideva* への依拠について考察をした。従来の研究では、チベット宗義書の影響で、彼の思想を *Candrakīrti* の系譜で捉える傾向にあるが、先行する論師で最も依拠しているのは *Śāntideva* である。また、彼は *Bodhibhadra* を中観の師と述べており、彼の論書も多く引用しているので、彼の中観思想を形成する上で直接の師となった *Bodhibhadra* との関係についても考察した。これらの考察から、彼の中観思想は、後代のチベット学者が見るような、中観自立論証派と帰謬派というような思想体系ではなく、瑜伽行唯識派の止の修行体系の上に中観の無自性論証の観をおくものであり、それは真言乗とも併存するものであることが明らかになった。このことは、彼独自の見解というよりも、時代的傾向に従ったものである。

第2部では、彼の個々の著作を取り上げ、それぞれの内容を分析した。第1編では、小部文献を取り上げた。テンギュルには、彼の小部文献の多くが二種類収録されている。

このことは、テンギユル以前に彼の著作集が編纂されており、それらの著書がテンギユルに再録された可能性を示すものである。ただし、すでに一つの文献が収録されているのに、同じ文献をもう一度取り上げた意図については明らかではないが、彼の小部集が大蔵経の別巻として存在しており、ナルタン版ではそれらの文献が中観部の最後の巻に移動したのであろう。新しいデルゲ版でそれが小部集として独立しているのは、この移動を修正したように思える。ただし、この小部集に収録されている著書についても、テンギユルの編纂者の意図があるために、いくつかの問題を含んでいる。すなわち、そこには菩薩行を説く顕教文献が中心にまとめられているのだが、テンギユルで密教文献とされる文献も数点含まれている。これは、テンギユルの編纂者と小部集の編纂者の解釈が異なったからである。個々の文献については、ここで言及しないが、小部集に含まれない文献についても本編で言及している『菩提道灯論細疏』と『中観説示開宝篋』については、それぞれ『菩提道灯論』と『中観説示』との関連文献なので、それぞれの章で言及した。『罪過懺悔儀軌』と『一切業障摧破儀軌』については、小部集に収録されていないが、他の儀軌文献と一緒に本編で考察した。また、『種姓誓願』も小部集に収録されていないが、顕教の小部文献であるために本編で考察をした。

第2編では、注釈書文献を取り上げた。般若部に収録されている『般若波羅蜜多撰義灯論』と『般若心解説』は、前者は Maitreya の『現観莊嚴論』に対する概説書であり、後者は『般若心経』の解説書である。蔵外文献に、Atiśa に帰される『十万頌般若経』を読誦用にまとめた小部文献である『十万頌般若撰義』があり、それについても本編の最後に加えた。経典の注釈書としては、もう一つ、『三蘊経』の懺悔儀軌に対する解説書である『業障清浄儀軌解説』がある。また、中観の論書に対する注釈書としては、Nāgārjuna の『経集』の概説書である『経集撰義』と、Śāntideva の『入菩提行論』に対する注釈書である『入菩薩行論釈』がある。これらの注釈書文献についての考察をした。

第3編では、大部のアンソロジーである『大経集』を取り上げた。テンギユルの中観部には Nāgārjuna の『経集』、Śāntideva の『集菩薩学論』、著者不明の『修習次経集』と並んで彼の『大経集』が収録されている。本論については、その概要と校訂テキストを公表しているのので、ここでは、第七章の執事を説く経典、第十八章の非行境を説く経典、第三十二章の星宿を説く経典について考察をした。また、全体を通して引用が多い『般若経』と『正法念処経』についても、彼の他の著書での言及も合わせて考察を行う。

第4編では、密教文献を取り上げた。本研究では、彼の密教思想を研究対象としていないのだが、若干の論書を取り上げた。まず、秘密集会タントラ関係の文献については、彼の伝記資料の書誌情報を検証するために、考察をした。ターラー成就法は、顕教文献におけるターラーへの言及を考察するために、本論に加えている。『金剛座金剛歌』は、小部集に収録されている『行歌』と対になる著書であるために、その注釈書とともに考察した。『根本過犯注』については、小部文献の『十不善業道説示』における Aśvaghōṣa の著作との同一性の問題に関連して、新たな問題が明らかになったので、ここに加えた。

すなわち、『根本過犯』については **Aśvaghōṣa** によるものと、**Dīpaṃkaraśrījñāna** の師でもある **Advayavajra** のものがあるが、本論ではその著者として第三者を提示している。このことは、**Aśvaghōṣa** に帰される小部文献の著者性について新たな問題を提示することになる。最後に、彼の顕教文献における密教文献への言及を取り上げた。これらの密教文献は、彼の思想基盤の形成に重要な役割を果たしているために、顕教の著作においても無視できないものとなっている。そのために、彼が顕教文献において密教文献をどのように利用していたのかは、考察すべき対象となっている。

第5部では、彼の思想がチベット仏教に与えた影響について考察した。これについては、彼の『菩提道灯論』を基軸にしてラムリム思想が形成されているために、それを中心に考察した。すなわち、タクポ・カギユ派の開祖である **sGam po pa bSod nam rin chen** の『ラムリム・タルゲン』とゲルク派の開祖である **Tsong kha pa** の『ラムリム・チェンモ』を取り上げ、それらにおける『菩提見道灯論』への依拠を考察した。また、**Bu ston rin chen grub** の『法行楽道』は、初学者文献である **Dīpaṃkaraśrījñāna** の『入菩薩初学者道説示』との関係から、ここで考察した。また、チベット仏教における『菩提道灯論』に対する注釈書について考察し、その注釈の系譜を明確にするために **Grags pa bshad sgrub** の注釈を提示した。

本研究では、以上のような問題点から、**Dīpaṃkaraśrījñāna** の小部文献を中心に整理して、それらの文献に説かれている内容を考察することで、彼の思想体系を解明することを目的としている。彼が、中観論者であることは、自らが明言している。従来の研究では、彼の中観に関する論書、特に『入二諦論』を中心に彼の思想を論じ、それを彼の中観思想と考察してきた。しかし、そこには後代のチベット宗義書が行ったような中観の学派分類の見地から論じるものが多く、彼を帰謬派の論者と断定するものもあった。しかしながら、上記の文献をすべて考察すれば、そのような理解は一部の著書の僅かな語句に基づく判断でしかないことは明らかである。本論からは、彼の中観理解だけでなく、瑜伽行唯識思想の理解、菩薩行の実践論、さまざまな儀軌の解説、大乘経典を含む経論に基づく聖典観、真言乗に対する言及に基づく密教観などを含めたさまざまな観点から彼の思想は形成されていることが明らかになった。